

自我領域に着目した街路空間の表記に関する基礎的研究

A Study on the Notation of street from the stand point of the Ego Field

時空間デザインプログラム
07M43086 木下智康 指導教員 齋藤潮
Environmental Design Program
Tomoyasu Kinoshita, Adviser Ushio Saito

ABSTRACT

This study aims to A) find out a method of notating streets' character from the stand point of Ego Field, and B) apply the method to actual streets in two areas to experiment it, which are Jiyugaoka 2-chome and Kamimeguro 2-chome. The characteristic of two area are following: 1) walking in Jiyugaoka, his or her Ego Field are expanding gradually and invisible Ego Field seldom exists. 2) In Kamimeguro, his or her Ego Field changes frequently and invisible Ego Field exist continually.

1. 序論

1-1. 背景と目的

現代日本の都市空間は、様々な主体の意図が混在しながら建築が集合し構成されていると言える。一般にこれらの建築は共同住宅のような共有壁を持たず、互いに独立した配置構成を持つため、外部空間に対して複雑な壁面線を供出していると言えよう。中でも街路空間は、道路などの公共空地だけではなく、所有上私的空間である建築敷地内空地も含めた一連の非建ぺい地の集合体として捉えるべきであり、先に述べた様な複雑な壁面線によって囲まれた外部空間の代表的な例であると言える。

街路空間における建築壁面と歩行者との距離は、壁面線の複雑さ故に歩行者の移動に伴い様々に変化する。これは逆に歩行者にとってみれば、自らの移動に伴って建築壁面が迫ってきたり遠ざかっていったりと感じられ、それにより人間の自我領域¹⁾（自己を中心とした、自己に帰属すると思われる空間的範囲）は押し狭められたり広がったりと変化するものと思われる。

そこで本研究は、人間の移動に伴う自我領域の変化に着目することで、①街路空間体験を記述する指標を提示し、②現実の街路空間に指標を当てはめることで、個々の街路空間の特徴を把握することを目的とする。

1-2. 研究の位置付け

建築壁面形状の変化によって生じる空間を扱った既往研究は以下のように分類できる。

- A) 実測調査やアンケート調査などをもとに、都市利用者による利用実態及び空間評価を明らかにするもの²⁾
- B) 実験心理学的なアプローチを用い、空間の形態と人間の認知特性との関係を考察したもの³⁾
- C) 空間とそれを規定する建築との配置関係に着目し、その類

型化を試みるもの⁴⁾

D) 空間の形態を物理量として定量化する方法を提示し、実際の都市空間を評価したもの

本研究は上記の分類においては D) に属すが、本研究は街路空間を取り囲む建築壁面によって人間の自我領域がどのように変化するかに着目することで、街路空間体験を記述するための指標を提示するものであり、このような研究は本研究よりほかに見当たらない。

2. 研究の方法

2-1. 研究の構成

【第2章】において、人間の自我領域について定義する。人間の自我領域の範囲⁵⁾が、平面的には人間を中心としたある一定半径の円で表わされると設定し、人間の領域・距離感覚に関する既往知見を参照し実験を行い、本研究で用いる自我領域の範囲を決定する。さらに、自我領域を可視／不可視部分に分けて捉えることにする。続いて、自我領域（可視／不可視部分）を定量化するための分析モデルを設定し、自我領域の変化を定量化するための分析指標を設定する。【第3章】では、2章で設定した分析モデル・分析指標を単純な仮想空間に当てはめる。まず、街路空間における立ち位置間隔を変化させ感度分析を行うことで、これを決定する。続いて、建築壁面形状を変化させ、指標の動き、またその意味について解析的に考察する。【第4章】は、前章までに定義した分析指標を実空間に当てはめ、指標ごとに対象地区を分析し、地区ごとの傾向を明らかにする。【第5章】では、4章で得られた分析結果を顕著に表わす具体的な街路空間を抽出し、その空間体験を記述するとともに、対象地の持つ特徴から分析結果について考察し、【第6章】で結論を導く。

2-2. 自我領域の定義

2-2-1. 自我領域の範囲の設定

まず人間の領域感覚についての指摘には、G. カレンの提唱した「here and there 理論」がある⁶⁾。カレンは、場の感覚を説明するものとして、空間に立つ人間が周囲の環境を here (こちら) と there (あちら) に分けて認識する習性があることを指摘している。樋口はこの論考をさらに進め、自身の「俯角 10° 近傍が人間の視線が自然に落ちる角度であり、人間にとって見やすい領域」という説と合わせ、視点から約 8.5m 近傍 (視点の高さを 1.5m に設定した場合) に (こちら) と (あちら) を分ける境界が存在していると論じている⁷⁾。

次に、人間を対象とした距離に関する知見には、識別距離の考え方がある。P. D. スプライレゲン⁸⁾は 40 Ft. (約 12m) が「顔の表情を見分けられる最大の距離」であるとし、人間からこの距離範囲を「都市の親しみあるスペース」と指摘している⁸⁾。また、H. プルメンフェルト⁹⁾や、K. リンチ¹⁰⁾も類似した指摘をしている。これらをまとめると、外部空間において人間が親密に感じる距離の範囲には、10m 付近に境界が存在していることが分かる。

続いて、ここまで抽出した数的尺度を確認するために簡単な実験を行った。

実験 (i)

5cm 四方の紙片を被験者前方 (被験者の正面に対して 180° 程度、被験者からの距離を概ね 5m~30m 程度とした範囲) にばらまき、そのうち (こちら) 側の限界と感じられる紙片を答えるという実験を、①均質な舗装が続く屋外空間②実際の商業地区で行った。

実験 (ii)

続いて、(i) で得られた距離の近傍 (±3m) にそれぞれ人を立たせ表情を変えさせ、被験者に表情の違いを認識できる限界を答えさせるという実験を行った。

2つの実験結果は、約 12m を示しており、人間の領域・距離感覚に関する知見から抽出した 10m 前後という範囲とある程度一致していることが分かった。2つ結果を照らし合わせ、本研究では人間の自我領域の範囲を半径 12m と設定する。

2-2-2. 自我領域と建築壁面との関係

人間が街路空間を移動するとき、人間を中心とした自我領域は街路空間を囲む建築壁面によって歪められ、その歪められ方は壁面形状及び人間の移動に伴い様々なパターンとなることが考えられる (図 1)。



図 1 自我領域の歪められ方

まず、①に対して②~⑤のタイプは、建築が人間の自我領域内に入り込むパターンである。これらパターンの場合、自我領域が建築によって切り取られ、自らに帰属すると思われる範囲内に、自らに帰属しない領域が含まれ、自我領域は縮小すると捉えることができる。つまり、自我領域の領域境界が建築壁面によって一部明確化され、自分を中心とした円と建築の外形線によって自我領域が形作られるパターンと理解することができる。

続いて、②に対して③~⑤のパターンは、自我領域内部の建築壁面形状に変化があるタイプである。これらのパターンでは、建築壁面によって視線が遮られ、自我領域内に視線が届かない場所が生じる可能性がある。本研究では、自我領域内において視線が届かない部分を「不可視部分」、その他の部分を「可

視部分」と称することにする (図 2)。「可視部分」とは、自分に帰属するよう感じられ、その範囲を占有しているよう感じられる部分であり、「不可視部分」とは、自分に帰属するよう感じられる距離範囲にありながらも、視線が届かないために、自らと関係づけられない部分である。

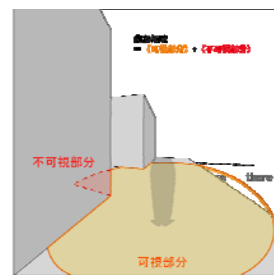


図 2 可視/不可視部分

可視部分の大きさが変化することによって、街路空間を移動する人間にとっては、自らに帰属する部分が増減する。これは、移動に伴って空間の獲得、喪失を経験することを意味すると考えられる。逆に、不可視部分の大きさが変化することによって、街路空間を移動する人間にとっては、自らと関係づけられない部分が増減する。自分と関係づけられない部分が自我領域内に存在することを積極的に捉えれば、人間に未知なるものへの期待感を与えることと考えられるのではないか¹¹⁾。つまり、不可視部分が増減することは、移動に伴った空間に対する期待感の増減を意味すると考えられる。

2-3. 分析モデルの設定¹²⁾

移動に伴った可視部分/不可視部分の変化の測定方法を図 3 に示した。この方法で、隣接する立ち位置間すべての変化量を計測し、各街路における自我領域の変化データとする。

2-4. 分析方法

■可視部分連続増加 (減少) 区間、区間長及び区間数

可視部分の変化が増加する移動区間がどれだけ連続するかを測る指標として設定する。隣接する 3 点間の移動で増加が連続する場合区間長を 2、区間をまとまりと捉え、区間数を 1 として計測する。

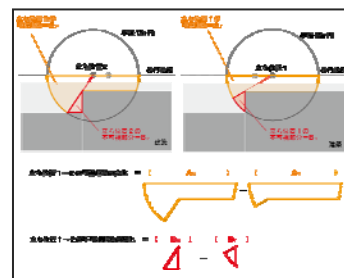


図 3 可視/不可視部分の変化

歩行者にとっては、可視部分が連続して増加する区間が長いということは、自らに帰属すると感じられる領域が、移動とともに拡大していく状態が長く続くことを意味する。

■可視部分増減反復区間、区間長及び区間数

可視部分の変化が増加減少を繰り返す移動区間がどれだけ連続するかを測る指標として設定する。隣接する 4 点間の移動で増加減少が繰り返される場合区間長を 3、区間をまとまりと捉え、区間数を 1 とする。

歩行者にとっては、可視部分が連続して増加減少を繰り返す区間が長いことは、自らに帰属するような領域が、移動とともに拡大縮小を繰り返す状態が長く続くことを意味する。

■可視部分増減急変区間、区間数

可視部分量が著しい変化となる区間を抽出し、加えてそれが単一街路空間に何区間含まれるかを測る指標として設定する。隣接する 3 点間の移動で増加が著しい場合区間数を 1 として計測する。

歩行者にとっては、可視部分量が著しい変化となるという

ことは、自らに帰属すると感じられる領域が急激に拡大することを意味し、単一街路内でその区間数が多いということは、街路を移動する際に、自らに帰属すると感じられる領域の急激な拡大を数多く経験することを意味する。

■不可視部分なし連続区間、区間長及び区間数

不可視部分が0となる状態がどれだけの区間連続するかを測る指標として設定する。隣接する3点間の移動で不可視部分が0の状態が続く場合区間長を2、区間をまとまりと捉え、区間数を1として計測する。

歩行者にとっては、不可視部分が0となる状態が長いということは、自らに帰属していると感じられる領域を常に見渡すことができる状態長く続くことを意味する。逆に不可視部分が0となる状態がない場ということは、自我領域内に視線が届かない部分を常に有していることを意味する。

3. 仮想空間におけるケーススタディ

3-1. 立ち位置間隔の感度分析

仮想空間上で立ち位置間隔を1, 3, 5, 10m 間隔と変化させ、それぞれの可視/不可視部分の変化をグラフで示した(図4)。

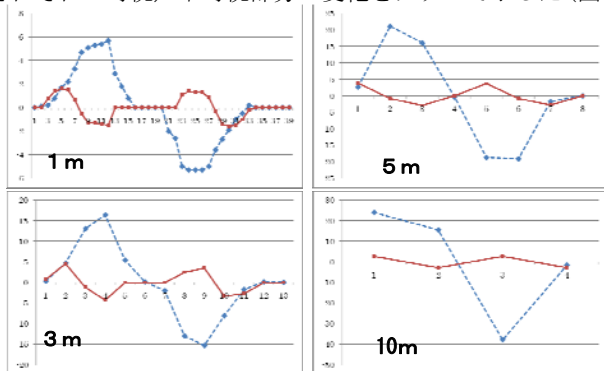


図4. 立ち位置間隔を変えた変化データ

可視部分は徐々に増加していき、壁面形状の変化点に最も近づいた時、その大きさは最大となる。また、不可視部分の大きさは壁面形状の変化点に近づくにつれて大きくなり、その後減少する。歩行者の立ち位置が壁面形状の変化点を超えると、不可視部分は0となり、不可視部分に変化のない状態が続く。この変化を捉えられるのは、1, 3m 間隔時の2つのグラフである。

この結果、立ち位置間隔は3m以下とする必要があることが分かった。2つの場合のグラフの形状に大差はないことから、得られるデータに本質的な差は生じないと捉え、合わせてデータ採取の効率を考慮した上で、本研究で用いる分析モデルにおける立ち位置間隔を3mと設定する。

3-2. 仮想空間を用いた各指標の解釈

壁面形状変化の深さ、壁面形状変化の長さを変化させ、仮想空間を設定した。また、立ち位置間隔は3-1で設定した立ち位置間隔を用いて仮想空間を設定した。

■可視部分連続増加(減少)区間、区間長及び区間数

仮想空間上での分析により、壁面形状変化の長さが大きい場合に指標の区間長が長くなった。つまり、可視部分連続増加区間長が長いということは、空間的には壁面形状変化が長いことを表すと考えられる。

この区間における歩行者の経験は、移動ごとに自分に帰属

すると感じられる領域を獲得し、移動に伴ってその領域が拡大していくことが想定できる。つまり、壁面形状変化に伴って自我領域が切り取られた状態から抜け出し、より開放的な空間へと侵入していくような経験と言える。

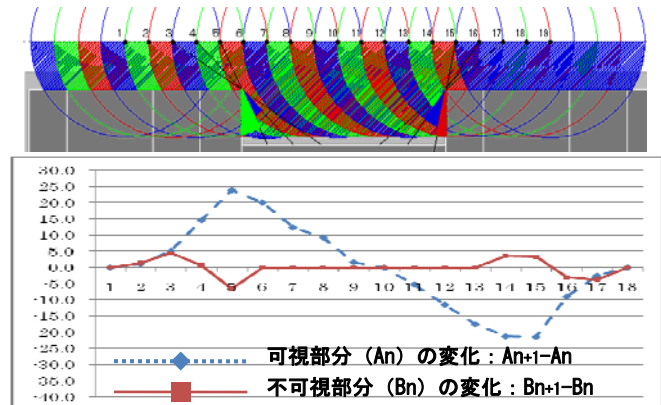


図5. 分析 MAP と可視/不可視部分の変化グラフ

可視部分増減反復区間、可視部分増減急変区間、不可視部分なし連続区間についても連続増加区間と同様に確認した。

4. 実際の都市空間と対象とした分析

4-1. 対象地の選定と概要

対象地の選定にあたって、東京都下の既成商業集積地区の中から商業密度、道路率、建ぺい率の似通った地域から対象を選定した。選定した対象地区を表1に示す。

4-2. 分析

■可視部分連続増加(減少)区間、区間長及び区間数

表1において、各街路の10m当たりの可視部分連続増加(減少)区間の出現数を出現率として計測した。また、各街路において、いったん連続増加区間に行き当たるとその区間がどの程度連続するかを表す数値として期待値を計測した。

$$\text{出現率} = (\text{区間数}) / (\text{街路長}) \times 10 (\text{m})$$

$$\text{期待値} = (\text{区間長の和}) / (\text{区間数})$$

■可視部分増減反復区間、区間長及び区間数

続いて、可視部分連続増加(減少)区間と同様に、表1において、各街路の10m当たりの可視部分増減反復区間の出現数を出現率として計測した。また、各街路において、いったん連続増加区間に行き当たるとその区間がどの程度連続するかを表す数値として期待値を計測した。

■可視部分増減急変区間、区間数

可視部分量が著しい変化となる区間を抽出し、その出現区間数を計測した。その際、可視部分が著しい変化となる基準を設けるため、計測データの各四分位値求め上位25%にあたるもの(数値が14以上の区間)を抽出し、各地区での区間数を計測した。さらに、各街路で10m当たりの可視部分増減反復区間の出現数を出現率として計測した(表1)。

■不可視部分なし連続区間、区間長及び区間数

不可視部分が0となる状態が、どれだけの区間連続するかについても、可視部分の変化に関する分析と同様に、表1において、各街路の10m当たりの可視部分増減反復区間の出現数を出現率として計測し、各街路において、いったん連続増加区間に行き当たるとその区間がどの程度連続するかを表す

数値として期待値を計測した。

表1 指標毎の分析データ

地区名	街路No.	街路長(m)	連続増加(減少)区間				増減反復区間				増減急変区間				不可視部分なし			
			区間長	出現数	出現率	出現率	区間長	出現数	出現率	出現率	区間長	出現数	出現率	出現率	区間長	出現数	出現率	出現率
自由が丘2丁目	1	北	4.2	2	0.47	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1	南	6.5	5	0.77	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	北	4.7	3	0.64	3	3	0.00	1	0.19	9	1.67	0	0	0	0	0	0
	2	南	2.7	3	0.56	3	3	0.00	1	0.19	3	0.56	3	3.00	1	0.19	0	0
	3	東	4.5	4	0.89	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	西	5.3	4	0.75	2	0.44	4	4.00	1	0.22	8	1.78	0	0	0	0	0
	4	東	5.7	4	0.69	5	5.00	2	0.20	14	3.37	6.9	7.50	2	0.20	0	0	0
	4	西	2.2	3	0.56	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	北	3.2	4	0.88	2	0.24	3	3.00	2	0.24	10	0.98	2.4	0.33	3	0.29	0
	5	南	3.2	4	0.88	3	3.00	2	0.24	10	0.98	2.4	0.33	3	0.29	0	0	0
	6	北	3.2	3	0.59	3	3.00	1	0.20	4	0.78	2.6	4.00	2	0.39	0	0	0
6	南	4.2	2	0.47	3	3.00	0	0.00	4	0.78	2.6	4.00	2	0.39	0	0	0	
7	北	3.4	3	0.59	4	4.00	0	0.00	8	1.57	7	7.00	1	0.20	0	0	0	
7	南	3.2	3	0.59	3	3.00	0	0.00	8	1.57	7	7.00	1	0.20	0	0	0	
8	北	4.2	3	0.71	4	4.00	1	0.17	2	0.33	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
8	南	8.2	3	0.50	3	3.00	1	0.17	7	1.17	4	4.00	1	0.17	0	0.00	0	
9	東	3.5	3	0.59	0	0	0	0.00	4	1.03	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
9	西	7.0	1	0.28	0	0	0	0.00	5	1.28	3.00	2	0.51	0	0.00	0	0.00	
10	北	4.0	1	0.33	0	0	0	0.00	2	0.67	7	7.00	1	0.33	0	0.00	0	
10	南	4.0	1	0.33	0	0	0	0.00	3	1.00	4	4.00	1	0.33	0	0.00	0	
11	北	5.3	3	0.56	0	0	0	0.00	7	1.23	2.2	2.3	3	0.53	0	0.00	0	
11	南	5.3	3	0.56	3	3.00	1	0.17	3	0.53	2.6	3.50	2	0.56	0	0.00	0	
平均			4.12	5.91	0.53	3.45	1.27	0.10	5.77	1.03	3.70	1.23	0.22					
上目黒2丁目	1	北	2.4	3	0.75	3	3.00	1	0.28	3	0.83	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	1	南	2.2	3	0.75	3	3.00	2	0.56	2	0.56	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	2	北	2.0	1	0.28	3	3.00	2	0.56	3	0.83	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	2	南	2.0	1	0.28	5	5.00	1	0.28	4	1.11	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	3	東	2.0	1	0.28	3	3.00	1	0.28	3	0.83	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	3	西	2.0	1	0.28	0	0	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	4	東	4.4	2	0.45	3	3.00	1	0.19	4	1.11	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	4	西	4.5	3	0.67	4	4.00	1	0.19	5	0.93	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	5	北	4.2	3	0.71	4	4.00	2	0.42	4	0.83	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	5	南	2.4	2	0.56	3	3.00	2	0.42	6	1.25	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	6	東	3.4	3	0.88	0	0	0	0.00	4	1.11	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	6	西	3.4	3	0.88	0	0	0	0.00	3	1.11	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	7	東	5.0	1	0.48	3	3.00	1	0.48	4	1.90	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	7	西	2.2	2	0.56	0	0	0	0.00	2	0.56	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	8	東	0.0	0	0.00	3	3.00	1	0.33	0	0.00	2	1.33	0	0.00	0	0.00	0
	8	西	0.0	0	0.00	3	3.00	1	0.33	0	0.00	1	0.33	0	0.00	0	0.00	0
9	北	3.2	2	0.63	4	4.00	1	0.37	4	1.48	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
9	南	4.0	1	0.37	4	4.00	1	0.37	1	0.37	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
10	東	2.4	3	0.75	0	0	0	0.00	3	1.25	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
10	西	3.3	2	0.63	0	0	0	0.00	4	1.67	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
11	北	3.2	3	0.93	3	3.00	1	0.28	2	0.56	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
11	南	5.0	1	0.28	5	5.00	1	0.28	4	1.11	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
12	東	4.0	1	0.33	0	0	0	0.00	3	1.67	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
12	西	6.0	1	0.17	0	0	0	0.00	2	1.11	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
13	東	2.2	4	1.82	0	0	0	0.00	5	1.94	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
13	西	2.6	4	1.54	3	3.00	2	0.42	1	0.21	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
14	東	3.0	1	0.33	3	3.00	1	0.33	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
14	西	3.0	1	0.33	4	4.00	1	0.25	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
15	東	3.0	1	0.33	0	0	0	0.00	0	0.00	3.2	2.50	2	0.51	0	0.00	0	
15	西	3.4	3	0.88	0	0	0	0.00	3	1.25	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
16	北	5.4	4	0.74	2	0.42	0	0.00	1	0.21	7.2	4.50	2	0.42	0	0.00	0	
16	南	4.2	4	0.95	3	3.00	2	0.42	2	0.42	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	
平均			3.11	3.28	0.54	3.45	1.63	0.28	2.61	0.90	3.50	0.13	0.04					

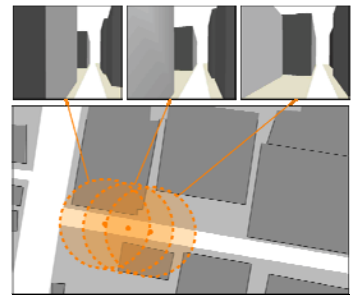


図6 自由が丘一④街路

体が見渡せる状態となっている。これにより、その場全体が自らにとって安全な場であることが確認され、単なる移動から外れた行動が誘発される可能性も考えられる。

実際の使われ方を見てみると、この場所は建築のバックヤードとして使われ、業務用バンの駐車スペースとなっている。しかし、その隅のちょっとした場所を歩行者が歩みをとめ、電話や喫煙、立ち話などに利用している場面も見受けられた。

このような利用が生じる背景には、自由が丘地区の持つ商業的な特徴が考えられる。道路自体が広いとは言えず、歩道の整備もなされていない物販系の商業集積地である自由が丘においては、このような壁面形状変化を積極的に利用して、歩行者の回遊行動を促す必要があるためと考えられる。壁面形状の変点に合わせて、街路の舗装やファサードなどを切り替えることで、街路空間の中であって際立った場に侵入していく印象を強めることもまた、回遊行動を促すことにつながると考えられる。また、自由が丘が区画整理により形成された街区を骨格としている点も背景として考えられる。街区形状に逆らって壁面線を変化させることで、単調になりがちな街路空間に変化を与え、回遊行動を促すとも考えられる。

6. 結論

(I) 人間の自我領域を定義し、人間の移動に伴った自我領域の変化を定量化するための分析モデルを設定した。

(II) Iで設定した分析モデルを用いた街路空間を記述する指標として、可視部分に関する「連続増加(減少)区間」「増減反復区間」「増減急変区間」、不可視部分に関する「なし連続区間」の4つ提示した。

(III) IIで設定した4つの指標を用いて、対象2地区それぞれで傾向を明らかにし、その傾向を顕著に表わす具体的な街路空間の体験を記述した。また、それらの傾向を、実際空間的特徴から考察した。

参考文献及び補注

- 齋藤は、場所と呼ばれる概念を、「人間が物理的・心理的かわりを通じて周辺環境からくり出す、自己を中心とした相対的に親密な領域」と説明している。本研究で定義する「自我領域」とは、この概念と同様に、建築壁面や人間の距離感やのかかりによって形作られる領域を指すものとする。篠原修ほか(1998)「景観用語辞典」彰国社 2)村野博司ら(1993)「市街地再編成時に創出された共用空地・空間の利用行動から見たアメニティ評価」日本建築学会計画系論文報告書(1994)「市街地再開発共用空地・空間の計画者から見た空地規模および形態別のアメニティ評価」日本建築学会計画系論文集3)松本直司ら(1995-2007)「街路の空間形状意識に関する研究(その1-その7)」日本建築学会計画系論文集・日本建築学会大会学術講演梗概集4)寺内美紀子ら(2002)「街路型建築作品における外部ヴォイド空間の構成」日本建築学会計画系論文集5)本研究で扱う自我領域は、本来的には3次元上の空間概念である。しかし、街路空間における建築壁面との関係を定量化するに当たり、今回は、3次元上の空間を2次元に投影したものとして、平面の円という形状を用いている。この形状の変換により、実際の視覚体験を完全に把握できない点は指摘しておく必要がある。6)G. カレン(1975)「都市の景観」鹿島出版社7)樋口忠彦(1975)「景観の構造」技報堂出版8)P. D. スプラインゲン(1972)「アーバンデザイン」日本サムシング9)H. フルメンフェルト(1953-54)「Scale in Civic Design」The Town Planning Review10)K. リンチ(1971)「教地計画の技法」鹿島出版会11)横は「見えがくれする都市」において、わが国特有の空間形成作法として「奥性」の存在を指摘している。他の文化圏に存在する遠心的な「中心性」と比較し、日本人の「奥性」に空間的な象徴性を持たせる空間感を説明している。齋藤は、「奥性」の発現の契機のひとつとして「不可視奥」の存在を指摘している。これは「見通しを遮るものが介在するため核心部が掌握困難な場合」である。本研究の不可視部分が生じる経験は、この「不可視奥」の経験に類似すると考えられる。不可視部分の増減が「奥性」の増減につながるとも考えられる。横文彦ほか(1980)「見えがくれする都市」鹿島出版会/篠原修ほか(1998)「景観用語辞典」彰国社 12)分析モデルを設定するに当たり、建築をトラスしMAPを作成するが、本研究では特に、建築壁面の形状と、人間の自我領域との関係に着目し、街路を記述することを目的としているため、建築のファサードや建築用途を扱っていない。実際の街路体験においてはこれらの情報は重要な要素として考えられることは当然である。13)本研究では、立ち位置間隔を連続的には扱っていない。人間の立ち位置を連続的に変化させ、自我領域の変化を扱う方が、実際の移動に近いデータが得られることが考えられるが、本研究の主目的は、自我領域の変化に着目して、街路空間の動態を捉える点にある。あくまで、壁面形状の変化の様を捉えることにあるため、立ち位置間隔を連続的に設定する必要はないと考える。

4-3. 4章のまとめ

■自由が丘2丁目地区

自らに帰属するように感じられる領域が連続的に拡大していくような経験が多くあり、このことは、領域の獲得がある程度の間隔をおいて経験される傾向があるという結果からも予想できる。また、その領域が急激に拡大(縮小)するような経験も多く、区間ごとに獲得される領域の差が大きいと予想できる。また、自我領域全体を見渡すことができる状態が長いという傾向もあり、自らに帰属するような領域を安定して獲得し続ける状態が長いと言える。

■上目黒2丁目地区

自らに帰属するように感じられる領域が拡大していくような経験は断続的に経験されることが多く、このことは、領域の拡大縮小が繰り返されることが多いという結果からも予想できる。また、その領域が急激に拡大(縮小)するような経験が少なく、移動に伴って獲得・喪失を繰り返す領域の差が比較的小さいと予想できる。また、自我領域内に視線の届かない部分を有する状態が長いという傾向もあり、移動するたびに、新たな期待を抱かせる地区であると言える。

5. 考察

4章で明らかにした傾向を顕著に示す具体的な街路空間を見てみると、図8のように、大きく建築壁面形状の変化した部分があることが分かる。このような壁面形状変化に近づいていくにつれて、歩行者に帰属するように感じられる領域は拡大し、壁面形状の変化点を越えると、不可視部分は0となる。このとき、街路空間を移動しながらも、その中に広場のよう領域の境界が明確化された際立った場を感じ取り、その中に入り込み佇んでいるような印象を受けることが考えられる。合わせて、この時不可視部分は0であり、自我領域全